

熊野の
木林から



エセレンボーが棲んでいた稲積島は、江戸時代の紀伊続風土記に「島の東端を埋め立てて陸続きにすると廻船が泊まることができ、必ずしや繁昌の地となるであろう」と評された島であるが、今では実際に堤防で陸続きとなっている。

すさみ町の怪異として、まず思い浮かぶのが、周参見の目の前に浮かぶ稲積島の「エセレンボー」だ。姿は鳥のようだが、獣のようだともいわれ、木の洞に巣を作り、釣りをしている人に悪戯(いたずら)をする。ある時、二人の漁夫が稲積島で釣りをしたところ、とても大漁となった。獲物を樹の枝につり下げ、しばらく釣りをする

怪熊野

「すさみの怪異」

其の(五)

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



けていたところ、後から奇妙な叫び声が入り返ると、つり下げた魚が消えていた。その後も奇妙な叫び声は止まず、石を転がしてきたり、木を投げつけてきたりして、キイキイと人を笑うような声まで聞こえてくる。結局、漁夫達は魚を持って帰ることができなかった。そんなことが続き、人々はエセレンボーの正体は「狸だろうな」と噂するようになる。稲積島に祭られている弁天様は四つ足(獣)が嫌いで、島には獣は棲(す)んでいなかった。エセレンボーは鳥か獣か分からない怪物だったために島にも棲むことができたが、狸ならば話は別。弁天様のお怒りか、実は狸ではなかったエセレンボーのアップルか、ある日の朝、波間に十数匹の狸の死体が浮かんだという。ところで、神武東征の折、民が稲束をこの島に積んで献上したことからこの島を稲積島と呼ぶようになったという伝説がある。

一方、周参見川の上流、上戸川(こどがわ)に



天明飢饉之図(福島県会津津美里町教育委員会所蔵、パブリックドメイン)。絵の中を詳細に見ると、その惨状、恐ろしい光景が記録されている。

ある広瀬溪谷の琴の滝には、滝壺に牛鬼(うしおに)が棲んでいるという。上戸川の牛鬼は、人の影を喰らう怪物で、影を喰べられた人は死んでしまふと恐れられていた。困った村人達は、正月に牛鬼に酒を供えるようにしたところ、酒好きの牛鬼は喜び、以降は人の影を食べなくなったという。琴の滝のすぐ下流には「牛鬼の滝」があるが、牛と牛、字は似ているものの双方の関係は不明だ。影を喰べる牛鬼の話は、すさみ町内にくっつきあり、例えば、佐本の奥にある宮城の牛鬼も琴の滝とほぼ同じ話だ。佐本は古座川流域の集落だが、下流の古座川や重畳山(かさねやま)の牛鬼とは性質が異なっているのに、山を越えた上戸川と同じであることは興味深い。後に佐本が古座川とはなく周参見と合併されることを、牛鬼が時を越えて予見していたかのようだ。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

